

「東京家族」★★★★★

2013(平成25)年2月8日鑑賞
 <梅田ブルック>

監督：山田洋次

平山周吉(広島県豊田郡大崎上島町在住の72歳の老人、元教員)／橋爪功

平山とみこ(周吉の妻、68歳)／吉行和子

平山幸一(周吉の長男、小児科医、東京郊外の開業医)／西村雅彦

平山文子(幸一の妻)／夏川結衣

金井滋子(周吉の長女、美容師、都内で美容院を経営)／中嶋朋子

金井康造(滋子の夫)／林家正蔵

平山昌次(周吉の次男、舞台美術のアシスタント)／妻木木聡

間宮紀子(昌次の恋人)／蒼井優

沼田三平(周吉の昔からの親友、元会社役員)／小林稔侍

かよ(沼田の通う居酒屋の女将)／風吹ジュン

服部京子(周吉の亡くなった親友の未亡人)／茅島成美

平山実(幸一の長男、野球部所属の中学生)／柴田龍一郎

平山勇(幸一の次男、小学生)／丸山歩夢

ユキ(周吉の隣家に住む中学生)／荒川ちか

2013年・日本映画・146分

配給／松竹

<あれから60年、新たな「家族」の物語が！>

私は小津安二郎監督の『東京物語』(53年)を映画館では観ていないが、テレビでは何度も観ている。しかし、本作をつくった山田洋次監督自身が「若い頃は小津安二郎監督の作品は退屈だった」と言っているのと同じように、戦後生まれてハリウッドの大活劇やサスペンス、そして70mmの大スペクタクル作品をたくさん観てきた私にも、ゆったりしたペースであくまで静かに進む家族の物語である『東京物語』はハッキリ言って少し退屈だった。したがって、その『東京物語』が「2012年英国映画協会発行の『サイト・アンド・サウンド』誌が発表した世界の映画監督358人が投票で決める史上最も優れた映画」の世界第1位に選出されたことにはビックリ！この受賞は、私に言わせれば、世界の映画監督が選出するこのシステムでは「玄人好み」の作品が評価されること、2001年にアメリカで起きた9・11同時多発テロをはじめ激動する世界情勢の中であらためて『東京物語』のような家族の物語が見直されたためだ。現に、『東京物語』は1953(昭和28)年のキネマ旬報ベスト・テンの第2位に選ばれているが、第1位は今井正監督の『にぎりえ』(53年)だったから、当時の評価としてはナンバー2だったことになる。

しかし、『東京物語』がすごいのは、「戦後数年を経た日本」という特有の時代状況の中で小津安二郎監督が描いた家族の物語が「普遍性」を有していることだ。もちろん、時代の変化と共に社会が変化し、それに伴って家族のあり方も変わるわけだが、それでも変わらないのは家族それぞれの思い。さあ、監督50周年の記念作品として、あえてそんなに有名な小津安二郎監督の『東京物語』をモチーフとしてリメイクした本作は、新たにどんな家族の物語を・・・？

<どんな家族？どんな俳優？まずは、それに注目！>

60年前の『東京物語』では、私の目はどうしても次男・平山昌二の嫁で戦争未亡人になっている平山紀子を演じた原節子に行ってしまったが、あくまでメインは尾道から久しぶりに東京に暮らす子供たちの家を訪ねてやってきた初老の男・平山周吉を演じた笠智衆とその妻・平山とみこを演じた東山千栄子の2人。また、長男の平山幸一を演じた山村聰や長女の平山志げを演じた杉村春子ら、今から考えればそうそうたる俳優陣の、静かで心こもった演技が見どころだった。

そんな『東京物語』へオマージュを捧げた本作では、老夫婦の故郷が「尾道」から「瀬戸内海の小島」に設定変更されたものの、そこに住む老夫婦が久しぶりに東京に住む子供たちの家を訪ねてくるという基本ストーリーは同じ。そして、本作では72歳の平山周吉役を橋爪功が、68歳の平山とみこ役を吉行和子が演じている。また、東京郊外で開業医を営む長男・平山幸一役を西村雅彦が、美容院を営む長女・金井滋子役を中嶋朋子が、長男の嫁・平山文子役を夏川結衣が演じている。

大きく異なるのは、『東京物語』では次男・平山昌二は戦死したという設定だったのに対して、本作では、妻木木聡が演じる次男・平山昌次が「舞台美術の仕事」と言えばカッコ良いが、実はフリーターのような仕事(?)をしている今ドキの若者風に設定されたこと。その結果、原節子の「立場」で本作に抜擢された蒼井優が昌次の恋人・間宮紀子とされたうえ、本作後半では昌次と紀子の「恋の物語」が平山家の「家族の物語」の中に大きなウエイトを占めてくる。まずは、本作におけるそんな「家族」構成とそれを演ずる俳優たちに注目し、『東京物語』との対比をしっかりと！

<「3・11以前」と「それ以降」の違いは？>

1945年8月15日の敗戦から68年目を迎えた日本は今、3年半にわたった民主党政権に別れを告げ、自民党の安倍内閣の下で新たな時代局面を迎えている。ヨーロッパでは、というよりキリスト教諸国では、イエス・キリストが誕生した年を基準として紀元前(BC)と紀元後(AC)を分けているが、日本は1945年の敗戦を境として、明治維新による「第1の変革」(1868年)に次ぐ「第2の変革」を遂げた。しかし、2011年に起きた3・11東日本大震災が日本にそして映画人に与えた影響とは？

東日本大震災の発生を受けて現地にカメラを持ち込んだ映画人は多く、原発問題を鋭く告白するドキュメンタリーを含む多くの東日本大震災をテーマとする映画が製作された。その中で強く私の印象に残ったのは、園子温監督の『ヒミズ』(12年)(『シネマルーム28』210頁参照)、『希望の国』(12年)(『シネマルーム29』37頁参照)、そして内田伸輝監督の『おだやかな日常』(12年)だが、3・11東日本大震災は本作の製作にも大きな影響を及ぼしたらしい。つまり、山田洋次監督は2011年4月1日のクランクインを目指していたが、その準備の段階で3・11東日本大震災が発生したことを受けて、その製作を延期することを決断したわけだ。

もちろん、本作は『ヒミズ』や『希望の国』のように被災地を直接の舞台にしたものではないし、『おだやかな日常』のように東京における放射能汚染の影響をテーマにした映画でもない。しかし、次男・昌次と昌次の恋人・間宮紀子との出会いの場を被災地でのボランティア活動に設定したこと、また、周吉が東京の居酒屋で同郷の古い友人・沼田三平(小林稔侍)と飲みながら語り合う中で「どっかで間違うてしまうんじゃない、この国は」というセリフを語らせていることをみれば、本作が東日本大震災を強く意識していることは明らかだ。そんな意味で、「3・11以前とそれ以降」の違いは「BCとAC」の違いほど大きいかもしれない(?)から、そんな思いが本作の中でどのように表現されているのかに注目！

<優しくしたいが忙しい。それが本音？>

戦後みるみるうちに映画が復興し、日本国民の楽しみの主流になったことは、キネマ旬報ベスト・テンが1946(昭和21)年から始まった(もともと、1946年は邦画8本、洋画14本のみでの順位付け)ことでも明らかだ。戦争終結後の昭和20年代は、小津安二郎監督はもちろん、今井正(『また逢う日まで』(50年)、『にぎりえ』(53年)、『ひめゆりの塔』(53年))、黒澤明(『羅生門』(50年)、『生きる』(52年)、『七人の侍』(54年))、木下恵介(『カルメン故郷に帰る』(51年)、『二十四の瞳』(54年))、成瀬巳喜男(『あにものうと』(53年))、溝口健二(『雨月物語』(53年))等々の「巨匠」が次々と名作を発表していた。1949(昭和24)年生まれ私には、もちろんそれらをリアルタイムでは観ていない。また、若い頃にテレビ放映や映画館での「〇〇特集」で観たそれらの作品の中では、黒澤明の『七人の侍』、今井正の『ひめゆりの塔』、木下恵介の『二十四の瞳』などの印象が強く、小津安二郎の『東京物語』にはそれほど強く魅かれなかった。しかし、今あらためて『東京物語』と対比しながら2012年という時代を「家族の物語」の視点から切りとった本作を観ると、物質的豊かさや生活スタイルは大きく変わっても、家族の絆や家族のあり方はほとんど変わっていないことがよくわかる。『東京物語』では東京で生活する長男夫婦、長女夫婦は何かと忙しいため、戦争未亡人である次男の嫁が年老いた(義理の)両親の世話をすることになったが、60年後の今も、長男夫婦、長女夫婦の忙しさは同じだ。そこでのキーワードは「優しくしたいが忙しい」だから、そんな物語の展開ぶりはあなた自身の目でしっかりと。

そんな状況下「苦肉の策」として長女・金井滋子があみ出した名案は、「両親へのプレゼント」として一流ホテルへ宿泊させること。しかし、その本質は体のいいやっかい払いだ。もちろん、最初からそうだったわけではないが、商店街のイベントでクソ忙しいところに、せっかく大枚をはたいて予約した横浜の一流ホテルでの2泊3日の予定を1泊で切り上げて家に戻ってこられたのではたまらない。ここで遂に金井滋子は「今夜は泊められない」と言い放ったわけだが、こういうストーリー展開は『東京物語』も全く同じだから、この際是非両者を対比しながらじっくりと鑑賞してもらいたい。そして、こうなりや、せっかく子供たちに会うことを楽しみに瀬戸内海の小島から東京にやってきた老夫婦が、「もう東京は十分」となってしまったのは仕方なし？

『東京物語』では原節子演ずる平山紀子の優しさが、逆に血のつながった家族の失われた絆を強調することになっていたが、さて本作では？

<この日、父親は最悪！母親は最高！>

今夜は泊められない！長女金井滋子からそんな「宣告」を受けた平山周吉は、同郷の古くからの友人・沼田が部長に出世した息子夫婦と共に羽振りのいい生活をしていると聞き、前から気になっていた友人へ線香をあげた後、沼田宅で泊めてもらおうと決定。無事に線香をあげた後、かよ(風吹ジュン)が女将をしている居酒屋で久しぶりに語り合うまでは良かったのだが、実は沼田家で息子の嫁がいい顔をしないため泊めてもらうことができないとわると・・・。また、健康のためにせっかく断っていた酒をしつこく勧められると・・・。「まあ、一杯だけ」「十何年ぶりの再会じゃないか」「これから先、いつ会えるかわからないのだから・・・」と勧められると、断れないのがお酒。その結果、酔いつぶれてしまい、夜中にタクシーで滋子宅へ帰ることになった周吉は、美容院にグロを吐いてしまったうえ翌朝幸一宅へ移動した(させられた?)周吉は、今は二日酔いもあって最悪！

それに対し、次男・昌次の家を訪れて「掃除、洗濯、食事の世話を」と決めたとみこは久しぶりに「母子の対話」をすることができたうえ、思いがけず恋人の間宮紀子を紹介されたが、これが意外に感じのいい娘さんだったからとみこは大喜び。そうすると、そんな風に自分の恋人を受けとめてくれた母親に対して、昌次はボランティアで行った福島被災地で偶然出会った紀子に一目ぼれし、すぐにプロポーズしたこと等を率直に打ち明けることになったから、昌次も紀子もすっかり幸せな気分。その結果、翌朝出勤前にわざわざ朝食を届けに来てくれた紀子に対してとみこは「頼りない(?)昌次をよろしくお願いします」と伝えるとともに、もしもの時のために用意していたお金の入った封筒まで紀子に預けることに。

最悪の日だった周吉に対して、こんな風に最高の一日を過ごすことができたともみこは、長男・幸一の家に戻った直後、嬉しそうにコトの顛末を話していたが・・・。

<神サマは何とも皮肉な試練を・・・>

『東京物語』も本作も「会話劇」だからストーリーの展開はわかりやすいが、そのことは逆に退屈感を与えることにもなる。したがって、私は正直なところ、本作前半から中盤にかけて少し退屈感を覚えていたが、「宿無し」になった老夫婦が長男の家に別々に戻ってきたところからストーリーは思わぬ方向に急転換していくことになる。つまり、「起承転結」の「転」の部分に入るわけだ。

その前兆はホテルで一泊が終わり、海を見ながら老夫婦が久しぶりの会話を楽しんでいた時、とみこが急に目まいを覚え、立ちくらみのような症状が出たところにあつたが、この年代の人間はそれくらいのことで大騒ぎしないのが常。機嫌よく幸一の家に戻り2階に上がっていきこうとしていた時、階段で倒れたとみこを見て、幸一が直ちに救急車を手配したのは当然だが、さて、とみこの症状は？町内の行事がいくら忙しくても「母親が倒れた！」となれば当然、滋子も病院に駆けつけたし、時間的に遅れたものの昌次も当然、病院へ。ここで興味深いのは紀子も一人で病院に駆けつけて昌次の到着を待っていたこと。昨夜はじめて会い、その晩と今朝あんなに楽しい会話を交わしたばかりなのに、その大切な昌次さんの母親が倒れてしまうなんて・・・。紀子がそんな風にとまどったのは当然だが、さてこんな局面で昌次は紀子のことを家族のみんなにどんな紹介をするの？

さらに事態は急転換。幸一の診断も救急車で運ばれた病院のドクターの診断も同じで、「長くもって明日の朝まで」とのこと。神サマは何とも皮肉な試練を与えるものだ。それまでは「家族」なればこそその親しみとわがままの両面を見せていた平山家の面々は、さてこんな「極限状態」の中、それぞれどんな対応を？

<想定どおりの葬儀だが、意外にも・・・>

本作は山田洋次監督50本目の記念作だが、ハナ肇を主演に起用し『馬鹿』シリーズの第1作となった『馬鹿まるだし』(64年)や『いいかげん馬鹿』(64年)、そして信賞千恵子主演の『愛の讃歌』(67年)や『故郷』(72年)など、彼の作品には「瀬戸内海の小島」を舞台にしたものが意外に多い。かつて小柳ルミ子が歌った山上路夫作詞、平尾昌晃作曲の『瀬戸の花嫁』は、現在JR四国の予讃線管内の駅などの列車発着時のメロディーとしても使われている名曲。その最大の特徴はキダ・タロー作曲の唯一のヒット曲(?)で北原謙二が歌った『ふるさとののはなしをしよう』と同じように、歌詞から自然に浮かび上がってくる瀬戸内海の美しい風景だ。

本作は「起承転結」の「転」の部分までの舞台は東京だが、「結」の部分の舞台は老夫婦が住んでいる瀬戸内海の小島に移る。本作はセットを多用したことが特徴で、瀬戸内海の小島にある周吉の家もセットらしいが、瀬戸内海の小島の風景だけは当然ロケ撮影されたものだ。愛媛県松山市で高校3年生まで育った私は、瀬戸内海の島の美しさをよく知っているが、本作に見る美しさは格別だ。『北のカナリアたち』(12年)で見た離島へのフェリーのシーンは寒々とした感じが印象的だったが、本作に見るフェリーのシーンは温かさがいっぱい、まさに絶品。

とみこの遺骨を腕に抱いて船を降り立つ周吉らを迎えるのは、隣人のユキ(荒川ちか)と周吉の亡くなった親友の未亡人・服部京子(茅島成美)たちだ。田舎のお葬式は何かと大変なイメージが強いが、今は何かと簡素化されているし、ユキや服部京子たちが家族同様のお手伝いをしてくれたおかげで、とみこの葬儀は無事に終わったようだ。しかし、葬儀が一段落してお茶を飲んでる時、早く東京に帰りたい気持ちが見え見えの滋子が母親の着物を「形見分け」してもらいたいと言いつつ、若年気まずい雰囲気生まれることに。そんな中、雨が降ってきたため早い便のフェリーに乗らないと欠航になってしまうかもしれない事態になったのは、滋子にとって幸一にとってもラッキーだったのでは？そうすると、「どうせヒマなんだから」という理由で昌次だけはしばらく残ることになったが、すると紀子は？

<「感じがいい」が2度。この国の将来は吾者に？>

本作では「感じがいい」という言葉が2度使われる。それも、同じ人間に対してだ。それを言うのは一人はとみこ、もう一人は周吉、そしてその相手は2回とも紀子だ。滋子も幸一も東京に帰ってしまったため、島に残ったのは昌次と紀子の2人だけ。周吉は妻を失ったショックもあってか全然紀子に口をきいてくれないから、紀子がそこにいづく感じたのは当然。ところが、昌次は万事段取りが悪く(?)、自分たちが島を離れる日時にしてもギリギリまで周吉に説明せず紀子任せだったから、しっかり者の紀子はなおさら大変。そんな状況下で訪れたのが本作の静かなクライマックスだが、そのシーンは本作で橋爪が実年齢以上の老けぶりを見せている周吉が、部屋の中で背中を丸めながら足の爪を切るシーンから始まる。しっかり形どりの挨拶を述べて周吉の前を立ち去ろうとする紀子呼び止めた周吉は、あらためて向き合っ座った紀子の顔をしじみじみ見つめながら、「あなたは感じがいい娘さんだ」と切り出した。そこから続く周吉の言葉は静かだが説得力のあるもので、それまで頼りないとはばかり思っていた次男・昌次にも「優しさ」といういい面があること、そんな昌次と何かとしっかり者の紀子が一緒になってくれたら父親としてこれほど嬉しいことはないことを伝えたから、これには紀子はビックリすると同時に大感激。いかにも山田洋次監督らしいクライマックスの演出だ。

『東京物語』では時代が180度転換する中でそれまでの日本の良き家族が失われていくという悲観的な視点が強かったが、本作に見る山田洋次監督の視点は楽観的だ。たしかに今、舞台美術の仕事をしているという昌次はフリーターのような状況だが、母親譲りの優しい気持ちは人一倍強い。そんな昌次がしっかり者の紀子と一緒になれば2人の将来は明るいから、この国の未来もこんな若者に託されているのでは？瀬戸内海を進むフェリーの上で海を見つめながら2人で話し合う昌次と紀子の姿を見ていると、そんなメッセージがひしひしと伝わってくる。はじめて『幸福の黄色いハンカチ』(77年)を観た時はそのラストシーンでドツと大量の涙がふれてきたが、本作のラストシーンはそんな感動的なものではない。しかし、本作のラストシーンに見る心にしみる温かさは格別だ。山田洋次監督50本目の記念作にふさわしい出来栄えに拍手！